

持続可能な「人生100年社会」に向けて

— 「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策」
を考えるために—

牧野 篤
(東京大学大学院教育学研究科)

報告の内容

1. 社会教育・生涯学習は社会基盤の基盤をつくるもの
2. 学びのニーズは個人（個体）にはない
個人のニーズは関係によって生まれる
3. 社会は、個人の孤立と依存によって壊れる
社会に信頼と想像力を再生する必要
4. 社会教育施設とくに公民館・博物館・図書館の外延を拡大する
一般行政の基盤を整備する施設として位置づける

5. 首長の交替によって政策・行政が左右されないように
ちいさな〈社会〉の自治を確かなものとする
自治のための「**学び**」
←**楽しさベース**の住民の学びと活動
6. **専門職**の重要性
社会教育主事⇨**社会教育士**⇨**学びのオーガナイザー**
7. **行政の「学び」化**
そのための仕組みづくり

少子高齢人口減少社会

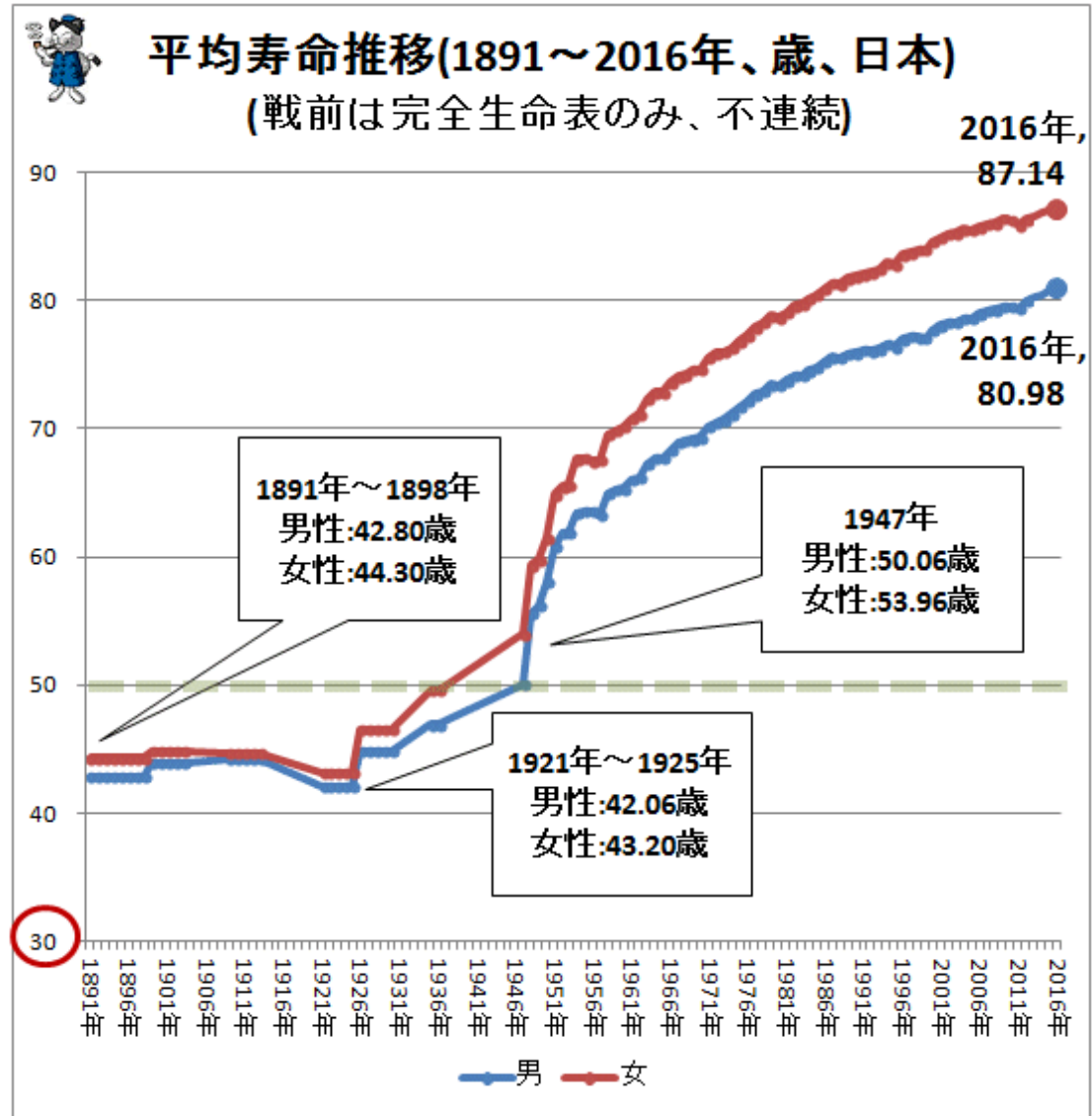
から

人生100年社会へ

1. いい社会なのに活かさない

日本人の平均寿命 (1891年～2016年)

100年前の2倍



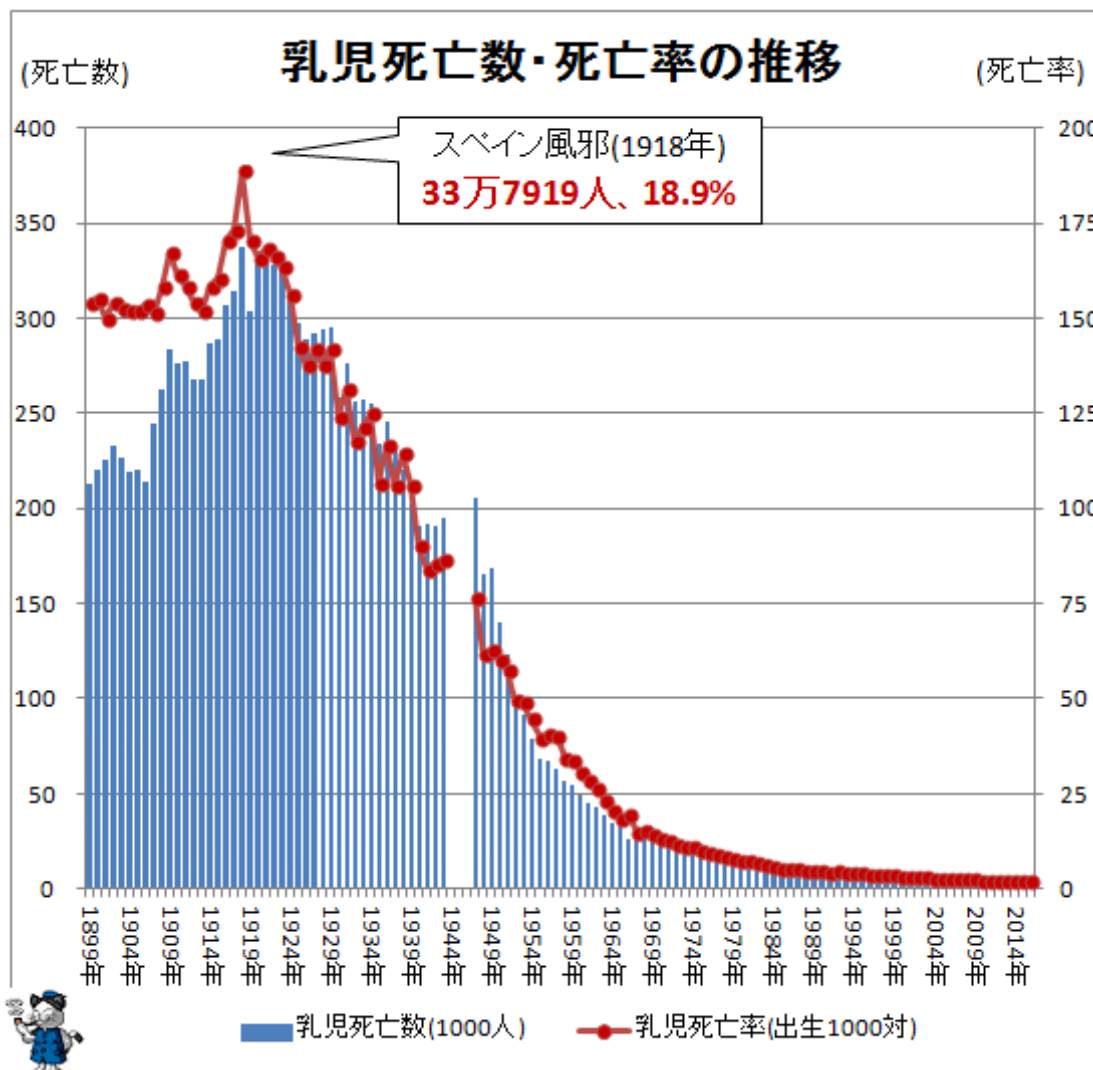
1000人あたり 乳児死亡率の変化 (1899年～2014年)

パーセントにすると
最高18.9%

⇒最低0.19%

100年前の100分の1

日本は世界で
一番乳児死亡率が低い



<http://www.garbage.net/archives/1890642.html>

生まれたら誰もが大きくなれ、長生きできる社会

結果としての少子高齢人口減少

いい社会なのでは？

いい社会を使いこなせない

2. 何が問題なのか？

／ちいさな〈社会〉づくりが焦点に

工業社会=産業社会

人を人口として扱う社会

(重商主義時代以降[1690年代以降]のこと)

人を道具・手段とする社会

人の欲望は所有欲求によって満たされる

神野直彦『「人間国家」への改革—参加保障型の福祉社会をつくる—』(NHK出版、2015年)

脱工業社会=知識社会

人をその人として扱う社会

(1980年代半ば以降の消費社会)

人を目的とする社会

人の欲望は存在欲求によって満たされる

神野直彦『「人間国家」への改革—参加保障型の福祉社会をつくる—』 (NHK出版、2015年)

**←イースタリン(Richard Easterlin)の逆説：
物質所有と幸福感は、
ある水準を超えると無関係になる**

= 知識社会の在り方

= 若者の物欲のなさが一つの現れ

神野直彦『「人間国家」への改革—参加保障型の福祉社会をつくる—』（NHK出版、2015年）

人を人口として扱う社会

個人は「個体」

欲求・ニーズは「個体」が持つものとされる

個人(個体)は集団的に処理されつつ、
個体として孤立し、集団に依存する

⇒孤立と依存

人をその人として扱う社会

個人は「関係態」

欲求・ニーズは「関係」に生まれるものとされる

個人(関係態)は集合的に存在しつつ、
相互に承認しあい、自立し、
集合を支える存在となる

⇒ 承認と自立

⇒ 想像力と信頼 = 市場の基盤の再整備

第2期教育振興基本計画

Society4.0(情報化社会)対応

ニーズを個人(個体)のものと見なした

**学習によって個人のニーズを満たしつつ、自己の社会価値を高めることで
社会的な位置づけを得る**

学習成果の還元による社会貢献を求める

⇒結果は芳しくない

社会の一層の解体

⇐ニーズを個体のもものと見なしたことで、

情報へのアクセス保障としての学習が市場化

公共財としての学習機会保障が後退

情報へのアクセスの格差が社会格差へと連動し、さらに貧困問題へ

第3期教育振興基本計画

**Society5.0(AI、IoT、ロボット、ビッグデータなどによる
社会課題解決とイノベーション)対応**

政府の定義：Society5.0

**(いまだに) 一人ひとりのニーズに合わせる形で
社会課題を解決する社会**

←ニーズは個人(個体)には存在しない

常に個人と個人がつくる「間」にその都度生まれるもの

社会課題も同様。関係性の存在

公共財としての学習機会保障を強化しないと

社会は分断され、市場は解体する

問題は、未だに、孤立と依存から抜け出せないこと

**孤立と依存は利己心と疑心暗鬼を生む
不安な社会**

互いに引きずり下ろしあう、下方平準化の社会

イノベーションは起きない

**承認と自立は他者に対する想像力と信頼を生む
社会が安定し、相互に慮る関係が生まれる
市場が安定する**

**この市場は物欲を満たす市場ではなく、
存在欲求を満たす市場
とともに生きる〈楽しさ〉
=自己を実現する楽しさを生成する市場**

とともに新たな価値を生み出しあう社会

人々が相互に承認関係を結べるちいさな〈社会〉の形成が重要

コミュニティと「学び」が焦点に

総務省：地域経営組織・地域生活総合支援サービス

厚生労働省：地域包括ケアシステム

国土交通省：国土強靱化・防災訓練

文部科学省：コミュニティ・スクール、地域学校協働活動

政府：人生100年時代構想会議

主要テーマ：学び直し・リカレント教育

どれも社会教育を基盤にしないと機能しない

3. 存在承認への希求／関係性の存在

若者の移動の動向

**公民館など地域の活動に熱心に取り組む層には、
共通して15歳までの地域活動の分厚い体験がある**

(東京大学牧野研究室と飯田市公民館との2014-15年度共同研究)

若者の移動・コミュニティへの定着

利便性より自然環境

地域参加意識

競争より充実

自然相手の仕事

仕事が生活

→

受け入れられること

文化的なもの

地域社会重視

中山ちなみ「若者の地域移動と居住志向：生活意識に関する計量分析」、『京都社会学年報』第6巻、1998年、p.105, p.106

人の健康・死亡と社会的関係性

**孤独・社会的な関係とその欠如は、
バイオマーカに大きく影響**

活動量にも影響

孤立・孤独は健康とは独立した変数として死亡にかかわる

**孤独感が死亡率に有意に作用する
←個人の社会ネットワーク・同居形態にかかわらず**

Angelique Chan “Aging and Social Policy in East and Southeast Asia”
東京大学高齢社会総合研究機構シンポジウム「活力ある超高齢社会へのロードマップ2030/2060」

**主観的な幸福感
孤独感に対応する政策形成が必要**

「同居していれば大丈夫」ではない

**→コミュニティのあり方が
死亡と深くかかわる**

Cf. ウィルキンソン『格差社会の衝撃』（書籍工房早山、2009年）

「健康」概念の再定義

病気・ケガ・障害の状態ではないこと



病気・ケガ・障害とうまくつきあいつつ
生活の質（QOL）を向上し続けられること

尊厳の尊重と生きる意欲

介護の過剰
医療の過剰
看護の過剰
福祉の過剰

が、人の尊厳と人権を傷つける

使える機能を使わせなくなることで
機能が衰退する
人として自立するという
尊厳が冒される

←オランダ：ビュートゾルフの実践からの知見

人の生きる意欲と地域コミュニティ

人が人として尊重されること
このことが、生きる意欲を生み出す

地域コミュニティも同様

限界集落が集落機能を失う最大の原因
= 気力の減退

「地方消滅論」の危うさ

4. ちいさな〈社会〉をたくさんつくる試み

東京大学生涯学習論研究室のちいさな〈社会〉づくりの試みの一端

1. シニア世代対象の社会参加促進セミナー事業
2. 地域住民を巻き込む多世代交流型コミュニティの構築
3. 若者と高齢者の文化的交流と
新しいライフスタイル形成による中山間村の活性化
4. 空き家の活用による地域の人的交流ネットワークづくり
5. 小中高校と地域住民のプラットフォーム形成による
ふるさとキャリア教育実践
6. 長野県飯田市の公民館と「地域人教育」実践調査
7. 長野県松本市の自治公民館をベースにした
新しい社会システムの形成
8. スーパーシニアが子どもにかかわるまちづくり事業
9. 自治会単位の地域経営を促す自律分散型社会の構築
10. 神奈川県「かながわ人生100歳ネットワーク」の形成事業
11. 企業と行政のボトムアップの協働による
新たな役割と市場創出のインパクト・ハブの実験 など

(1) 公民館活動から次世代育成へ

長野県飯田市では公民館をベースにした住民自治によるまちづくりが既に半世紀も展開されており、住民たちが自らの生活の在り方を「公民館をやる」というほどにまで生活と公民館における実践が一体化し、住民自身がともに地域社会を動かし、治め、自らの生活を価値豊かなものへと組み換え続ける実践を進めている。そこではまた、市の職員が公民館主事として、地域での実践経験を積み、それを行政施策へと反映させる循環が形成されている。

さらに、飯田市では、次世代の育成にかかわって、地元の職業高校との連携協働による「地域人教育」が近年盛り上がりを見せており、高校生がまちづくりの主役へと踊り出てきている。

地域人教育 平成 26 年度のまとめ

飯田市公民館主事会地域人教育PJ 作成



1 年生中心市街地フィールドスタディ



3 年生課題研究 橋北地区運動会に参加



3 年生課題研究 東野リヤカー商店



3 年生課題研究 松尾八幡商店街で喫茶



3 年生課題研究
下久堅ひさかた和紙でランプシェードづくり



3 年生課題研究 鼎駅の美化活動の一環で

地域人教育プロジェクト 年間総括

1 プロジェクトの目的

『高校生のふるさと意識や社会貢献意識の醸成を図る取組みを研究する』

2 活動目標

- (1) 高校生へ地域活動の様子や大切さを伝える
- (2) 高校生の地域デビューを支援し、高校生の地域における居場所と出番作りを創造する
- (3) 高校と地域の関わりや、両者への支援の仕組み作りを行う
- (4) 活動を通して得られた知識や情報、成果を主事会に共有する

3. 活動内容

(1) 各地区での活動

地区	活動期間	概要
橋北	6月～12月	市民運動会へ参加、橋北イルミネーションフェスタの企画運営
橋南	5月～11月	りんご並木歩行者天国イベントへの参加
東野	5月～11月	リヤカー行商
松尾	10月～12月	サンロード八幡 にぎわいプロジェクト
下久堅	4月～2月	ひさかた和紙の商品化と販売
鼎	4月～11月	リヤカー行商
	10月～12月	鼎スターゆるキャラ作成、地区内駅掃除、安全マップの作成
上村	5月～11月	農業体験、イベントの参加、観光PRと販売

(2) プロジェクト全体での活動

実施日	概要
5/21	「公民館活動と高校教育の共通点を探る」をテーマに、PJメンバー、長姫高校商業科教諭、松本大学白戸教授の三者で合同学習会を実施
7/28、29	長姫高校商業科の1年生を対象に、橋北、橋南、東野地区において、計4コースに分かれてフィールドスタディを実施
12/2	松本市上土地区商店街のまちづくりとそれに関わる松本大学学生の活動の視察及び商店街関係者、学生との意見交換を実施
1/20	「高校生に対するアプローチはなぜ必要か!?」～地域が高校生と行う活動の実践から学ぶ～をテーマに主事会にて研修を実施

(3) アンケート調査

今年度の地域人教育の活動前と活動後の計2回、地域人教育を通じて高校生のふるさと意識や地域貢献に対する意識変化を調査するためにアンケートを実施した。(詳細は別紙参照)

○調査対象：飯田OIDE長姫高校の商業科生徒

1年生…80名、2年生…71名、3年生…65名 合計216名

○実施時期：1回目…7月下旬 2回目…1月下旬～2月下旬



子育ての中の親たちと、お年寄りの目線でまちを歩くコース

平成26年度 地域人教育PJ

高校生の力が地域を支える 地域人教育各地区実践レポート

[2年生]地域を学ぶ（「広告と販売促進」授業支援）

- ・橋 南：「りんご並木の事例からまちづくりを考える」

[3年生]地域から学ぶ（「課題研究」の支援）

- ・橋 北：「橋北市民運動会、橋北イルミネーションフェスタ」
- ・東 野：「リアカー販売」
- ・松 尾：「サンロード八幡にぎわいプロジェクト」
- ・下久堅：「ひさかた和紙の商品化と販売」
- ・鼎 鼎：「鼎スターゆるキャラ作成、地区内駅掃除、安全マップの作成、リアカー販売」
- ・上 村：「農業体験、イベントの参加、観光PRと販売」



地域人とは....
地域を「愛し」、「理解し」、
地域に「貢献」する人材

高校生地域ブランド ひめたま





Sturdy Egg 高生まちおこしサークル

古家と家守のマッチング

桜咲造(シェアスペース)
地元企業と大人の支援

こどもまち博：子どもをネットワーク

高校生カフェ：食のアピール

JR品川駅との連携事業：駅弁企画、販売実習

南信州帰省鈍行：魅力再発見

**→小規模事業とコラボレーション
起業へ**

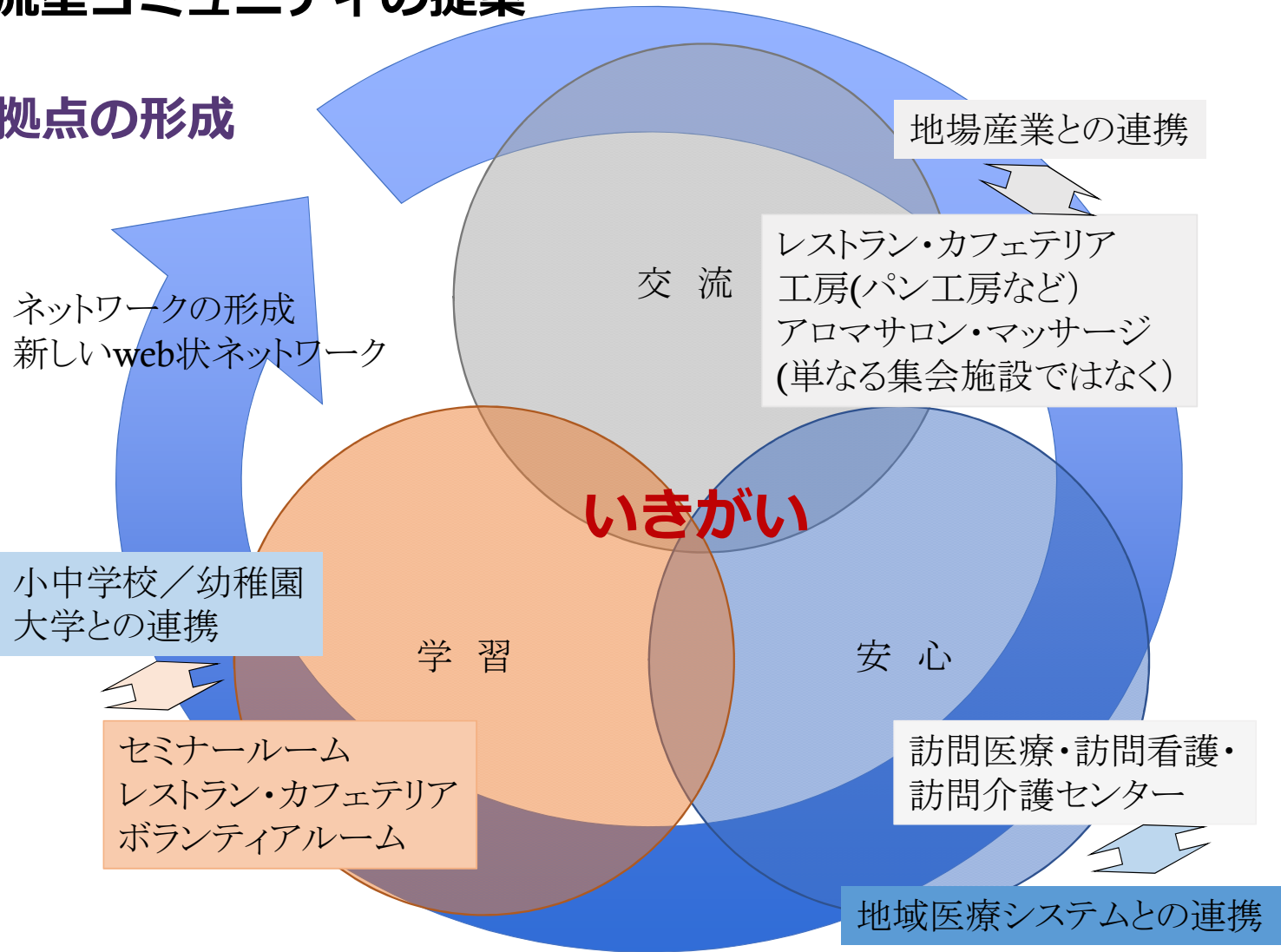
(2) 多世代交流型コミュニティの実践

千葉県柏市のある地区で進められているのが「多世代交流型コミュニティ」の実践である。これは、高度経済成長期に開発され、現在急激な高齢化に見舞われている戸建て団地地区をフィールドに、範囲を小学校区に広げた上で、高齢者がその他の世代と交流すること、とくに高齢者が孫世代と交流することで、次世代を育成し、自らがコミュニティの主役となるという、ちいさな〈社会〉をつくりだす試みである。この核となるのが、高齢者が組織する多世代交流型コミュニティ実行委員会と彼らが経営するコミュニティカフェである。

この取り組みを通して、コミュニティカフェには子どもを含めた100名を超える住民が毎日訪れては、交流し、地域活動を展開することで、地域の人間関係が劇的に変化し、互いに慮る関係がつくられている。また、実行委員会は小中高校・特別支援学校とも連携して、子どもを支え、見守る活動をしており、地域からは「多世代さん」と呼ばれて、地域活動の大黒柱として頼られる存在になっている。

多世代交流型コミュニティの提案

拠点の形成





**子どもとの交流が活発化
学校行事を請け負う**

小中高校・特別支援学校と連携

**子育てに優しい地域との評判
子育て世代が転入
学校が学級増へ**

楽しくて仕方がない

(3) 若者たちによる中山間村活性化

愛知県豊田市の中山間村で進められている「若者よ、田舎をめざそう」プロジェクトである。急激な過疎・高齢化に見舞われている中山間村に若者たちが移住し、農林業で生活の基盤をつくりつつ、地元の高齢者が伝承してきた文化と若者たちの都市的な文化とを融合させて、新たなライフスタイルをつくりだし、都市に発信することで、農山村と都市とをシームレスに結びつける試みである。

彼らはこの土地で、農林業で自らの生活基盤をつくりだしながらも、スモールビジネス研究会を立ち上げて、さまざまな事業を展開し、間伐材の利用から有機栽培の小麦を使ったお菓子の製造販売、都市民の農業体験プログラム、ワールドキャンパスの誘致、さらにエネルギー自立圏の構想と実験などさまざまな取り組みを進めている。この実験地区は、戸数30、人口40ほど、高齢化率50パーセントであったが、現在では、若者たちの移住と出産で戸数50、人口90、高齢化率30パーセントへと劇的な変化が生まれている。

また新たに、廃校となった学校跡地を地域コミュニティの生活文化拠点とする構想が動き始めている。彼らは、ここでの生活を暮らしと仕事が一体化した「暮らしごと」と表現している。









地域を担う人材創造拠点
つくラッセル

仕事を分け合う・負担を分け合う

生活を支えあう・収入を分け合う

地域全体をグループホームに

エネルギーの自立圏へ

中山間地が日本の最先端地域へ

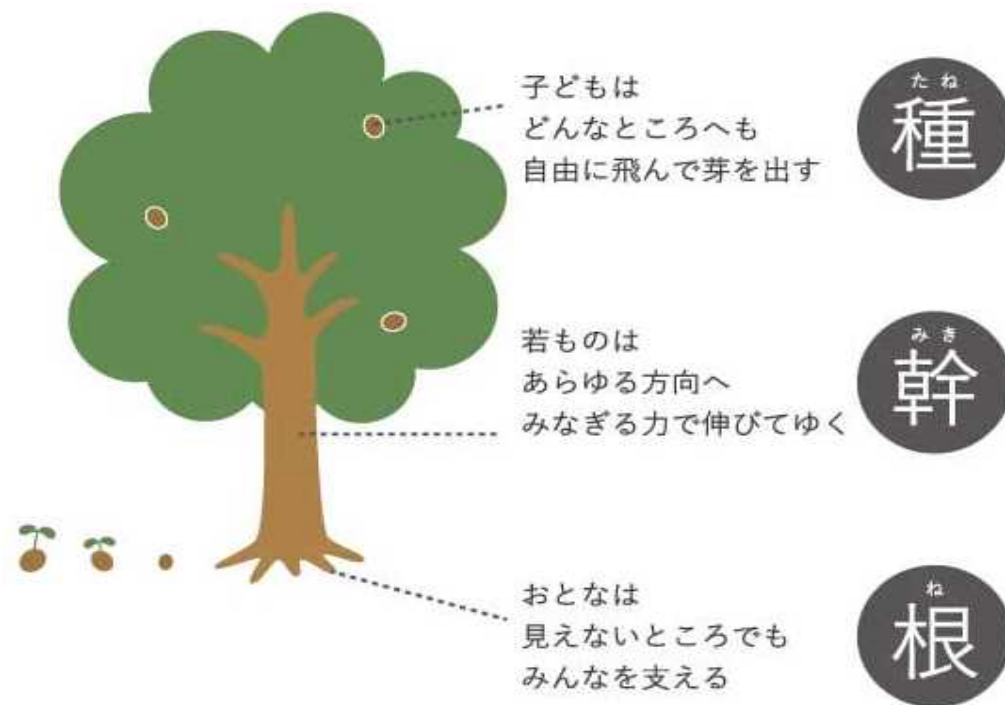
生きかた、暮らしかたを問いかけながら、
ライフステージに合わせて変化していく

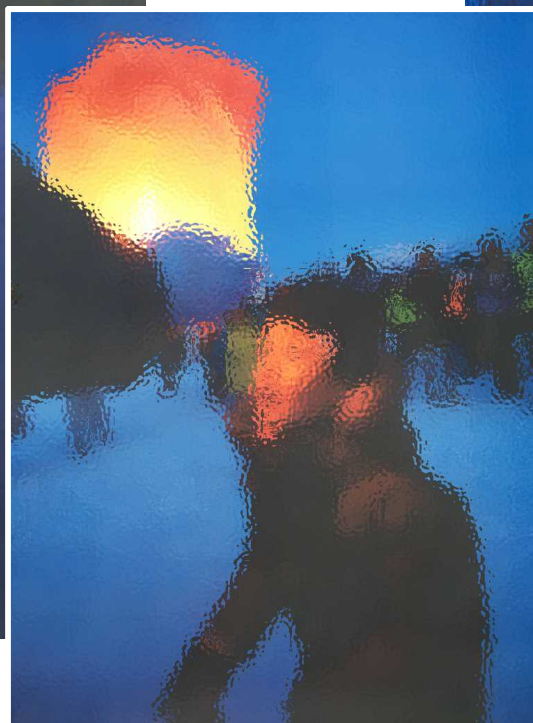
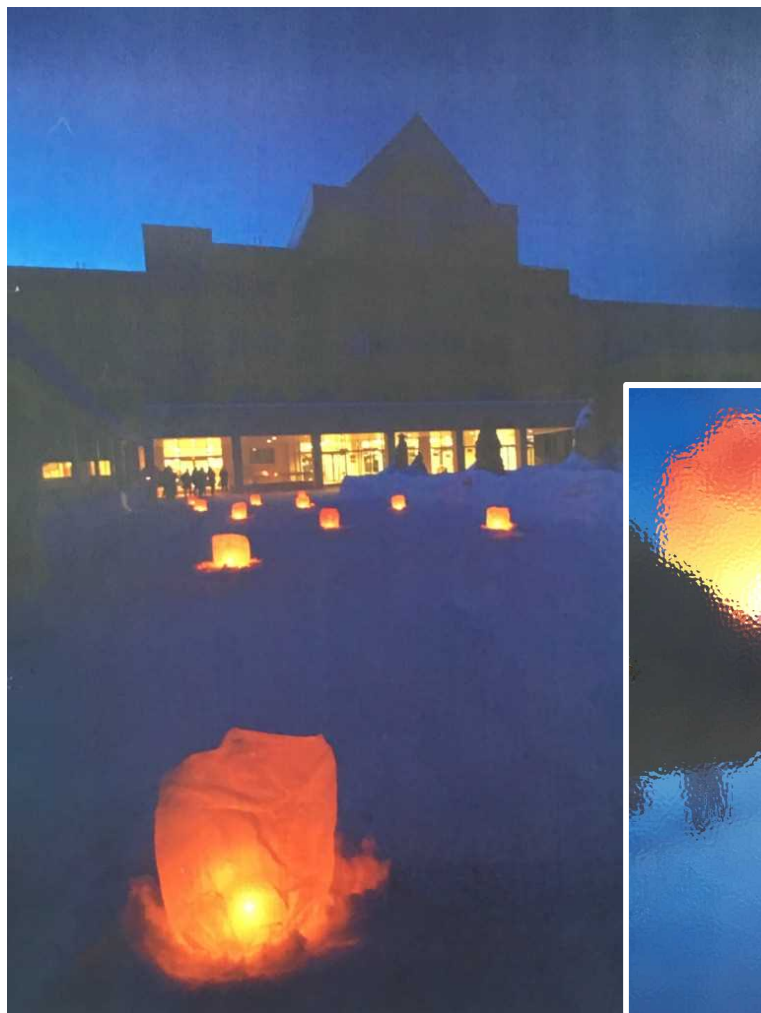
暮らしごと

(4) 小中高校12年間一貫のふるさとキャリア教育

北海道教育庁が道内14振興局で実施したプログラムで、地元の小中学校と道立高校とを結びつけ、子どもたちの相互交流を進めるとともに、子どもたちと地元住民・経済界との連携を強化して、12年間にわたって子どもたちの成長に住民がかかわることで、自分を育ててくれた地元への理解を深めようとする試みである。「子どもダイスキ」プログラムと「地元ダイスキ」プログラムから構成されている。

このうち、たとえば上川振興局の富良野市を舞台にした取り組みでは、富良野市立小中学校と道立の総合職業高校とが連携し、さらに小中高校生と地元の連携組織である「ふらのみらいらぼ」とが協働して、子どもたちがまちづくりにかかわる仕組みを構築して、子どもを主役にして、おとなや若者たちがそれを支援する取り組みを続けている。





ふらのゆめランタン



ウェディングプランナーになろう





(5) 人生100年時代インパクト・ハブ

これまで自前主義かつトップダウンで進められていた各企業や行政の高齢社会への対応を、相互に協働しつつ、ボトムアップに切り換え、人々を消費者とみなしてサービスを提供する企業・行政の在り方から、人々とパートナーとなり、人々が社会の主役になるのに伴走する企業・行政の在り方を模索する試みを続けている。現在、一部上場企業を含む約40社が組織されている。

この試みでは、企業・行政の在り方が従来の拡大再生産の時代とは決定的に変化していることを見て取ることができる。顧客・住民と企業・行政との関係が変化してきているのである。それは、サービスの提供-享受の関係から、ともにコミュニティを形成し、経営する協働・相補の関係への組み換えだといつてよい。

そこではたとえば、高齢化が進展する団地で、デベロッパーと住民とがパートナーの関係を結んで、地域生活支援サービスの拠点形成を進めたり、住民が自ら新たなコミュニティ形成を進めたりする活動を不動産会社が支援し、世代間交流が活発になされ、持続可能な団地をつくりだす試みなどの動きを見ることが出来る。

まちづくり協議会 定例会



街は、人でできている、ENJOY☆季美の森

ミライズキミノモリ

未来×好き×季美の森

Do What you love!

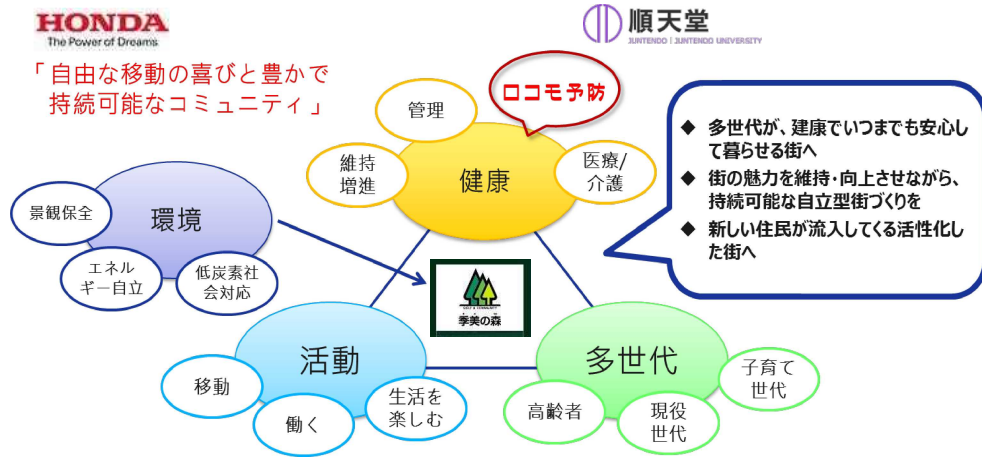
「季美の森の素晴らしい環境を生かして、好きなことをやってみる」
それがミライズキミノモリのコンセプト、
自分や家族が楽しければ、共感者も現れ、やがて街中に想いが伝わるはず。
未来の季美の森をつくるのは、今の私たちなのだから

季美の森は人が財産・宝。住んでいる人が好きだから、季美の森が好き。

季美の森自治会連合会の特別委員会であるミライズキミノモリは、季美の森の環境を住民自身が楽しむために、さまざまな“コト”づくりを行っています。2017年度、その活動はますますパワーアップし、多くの方々のご協力のもと、15の“コト”づくりを実現しました。



住民主体の、自立型・持続型の多世代&多様な価値創造のまちへ
 新たな暮らし方・働き方からの価値創造イノベーション



「季美の森」住民と地域、産学連携、共創による「ライフスタイルイノベーション」

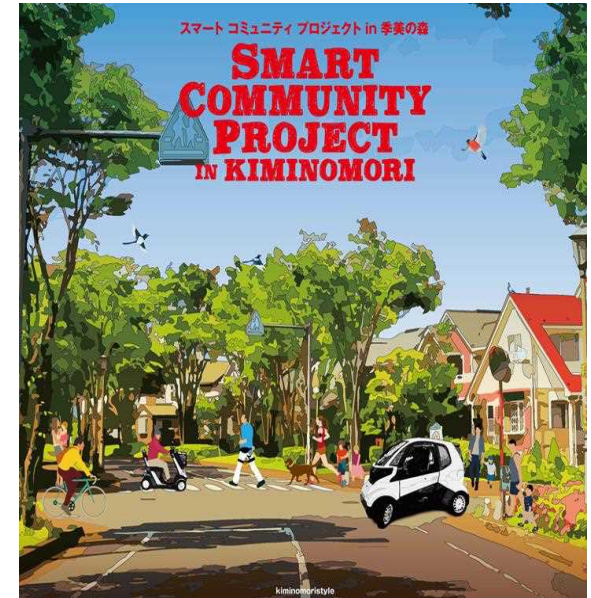
住民主体の
 活力あるまちへ

多様な価値創造と交流による
 ライフスタイル・イノベーション

住民が健康な街
 住民が安全な街
 住民が便利な街
 <人×コト×情報>
 住民が楽しい街
 住民が豊かな街

Aging in place
 Smart Community
 Project

Kiminomori
 Happy Aging Community



スマートコミュニティプロジェクト in 季美の森
 Bright Future for All Ages with Health Innovation by Daily Exercise
 季美の森
 東船不動産ホールディングス

**人はお客様になると、
駆動力が落ち、ニーズが低下する**

↳与えられ、依存する存在となる

↳お客様は、受動的な存在

↳自分が躍動しないし、楽しくない

**企業がすべきは、
人をお客様にすることではない**

**人を主役にする事
自分への駆動力が生まれるような
関係をつくること**

**自分がこの社会と歴史に
生き生きと息づいていること
を感じられるように支えること**

**すべての人が主役として
人とともに生きる社会**

**企業の役割は、
人が人とともに
社会の主役になり
新たな社会価値をつくりだすように
寄り添い、支えること**

**自らが生活の中で、他者ととともに、
意志決定を行う社会
自らの意志で、他者ととともに生きる社会
その意志決定と生活を支える企業や行政
その基盤は〈学び〉**

**このことが、人々の間に相互承認関係を生み出し、
想像力と信頼感をつくりだし、
新たな価値=ニーズをつくりだし、
市場をつくりだし、
人々を自立させる**

**企業は、この関係をつくりだす「間」の存在
=公共的存在になる**

5. 公民館を考える

公民館構想70周年－公民館の黎明期－

- 1945年 第二次世界大戦終戦
- 1946年 「公民館の設置」に関する文部次官通牒発出(7月21日)
寺中作雄（文部省社会教育課長（当時））
『公民館の建設－新しい町村の文化施設』発刊（※寺中構想）
日本国憲法公布(11月3日)
- 1947年 「教育基本法」公布・施行(3月)
日本国憲法発効(5月3日)
第1回優良公民館表彰実施
- 1949年 「社会教育教育法」公布・施行 公民館の法的根拠が示される。
- 1951年 国による公民館施設補助金の交付開始
→以降、平成9年(1997年)度まで、公民館等の施設整備の補助を継続。
- 1959年 「公民館の設置及び運営に関する基準」（文部省告示）
公民館の施設規模、対象区域、設備などの基準が示される。

公民館の機能

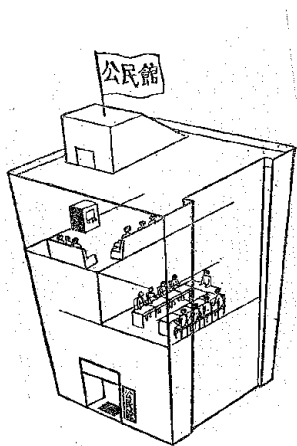
『公民館の建設』（寺中作雄著）より

1. 公民館は社会教育機関である。
2. 公民館は社会娯楽機関である。
3. 公民館は町村自治振興の機関である。
4. 公民館は産業振興の機関である。
5. 公民館は新しい時代に処すべき青年の養成に最も関心を持つ機関である。



要するに公民館は**社会教育、社交娯楽、自治振興、産業振興、青年養成の目的を総合して成立する地域の中核機関**である。

民主的社会教育機関です

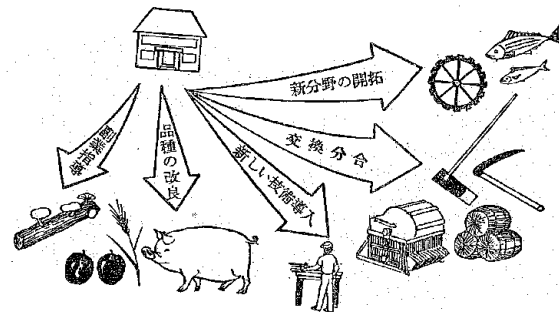


村の茶の間です

親睦交友を深める施設です



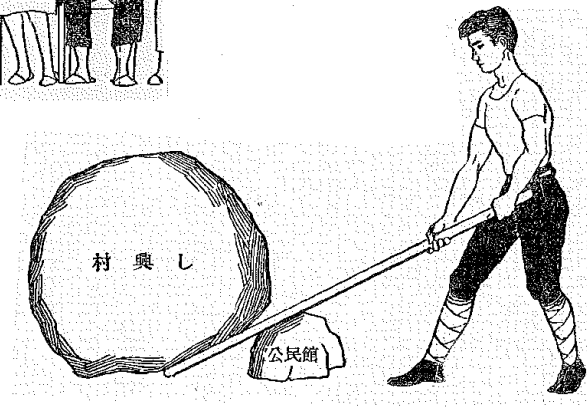
産業振興の原動力です



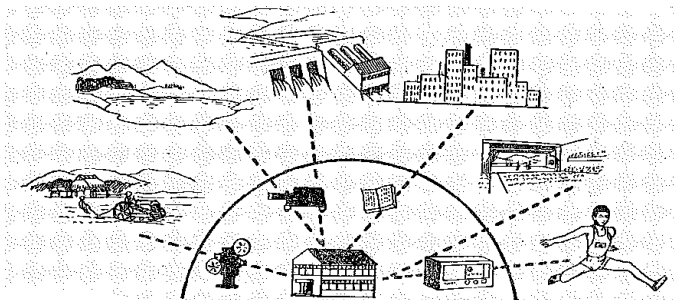
民主主義の訓練場です



郷土振興の機関です



文化交流の場です



小和田武紀『公民館図説』(1954年)より：文部科学省提供資料

○公民館の設置運営について（S21.7.5 文部次官通牒）

国民の教養を高めて、道徳的知識的並に政治的の水準を引上げ、または町村自治体に民主主義の實際的訓練を与えると共に科学思想を普及し平和産業を振興する基を築くことは、新日本建設の為に最も重要な課題と考えられるが、此の要請に応ずるために地方に於いて社会教育の中樞機関としての郷土図書館、公会堂、町村民集会所等の設置計画が進捗し其の実現を見つゝあるのも少なくない事はまことに欣ばしいことである。よって本省に於ても此の種の計画が全国各町村の自発的な創意努力によって、益々力強く推進されることを希望し、今般凡そ別紙要綱に基く町村民公民館の設置を奨励することゝなったから、青年学校の運営と併行して適切な指導奨励を加えられる様、命に依って通牒する。

尚本件については内務省、大蔵省、商工省、農林省及厚生省に於て了解済であることを附記する。

公民館には特定の役者も演出家も用意されていない。舞台装置も演出家も何もかも一切合財皆がやるのだ。そして観客は一人も居ないのである。そういうのが公民館であろう。面白い芝居を観ようとするのではなく、よい芝居を演じようとするのである。そして一人ひとりが皆揃って千両役者や偉大な演出家になろうとするのである。**公民館には観客は一人も居ないのである。**

(橋本玄進「みんなの公民館」『竜丘村公民館報』第1号、1948年3月1日)

(木下陸奥『地域と公民館－自治への憧憬』南信州新聞社出版局、2012年、106頁)

**住民による地域経営の
文化を生み出す場所であり
生活そのもの**

単なる教育施設ではない

**地域経済と密接にかかわる
自治的生活を生み出す「場」**

社会をつくる「場」

「公民館をやる」

(東京大学社会教育学研究室 飯田市公民館調査における住民の発言)

**いわゆる社会教育施設となった
公民館のウイングを拡げる**

←いわゆる公民館ではないところから考える

6. 専門職としての主事の在り方再考

住民が、
**「学習」と「働くこと」が融合した
地域コミュニティ**をつくり出すこと

= **文化**の生成

つながりの生成

**社会教育主事
養成・活用の改革**

**「社会教育士」(称号付与)として
社会の至る所に存在する**

⇒学びのオーガナイザー

計画論から経営論・実践論へ

**住民の中に入って、
地域社会を住民とともに作り、経営する専門家**

社会教育主事⇨社会教育士⇨公民館主事

**より住民に近いところで、
住民に寄り添って、
声にならない声を聞き、言葉にして返し、
「学び」を組織する**

**⇨飯田市の公民館と公民館主事
(住民活動の黒衣としての主事と行政職員の主事化)**

公民館=人が集まりたくなる「場所」

公民館のウィングを拡げよう



公民館のアウトリーチ：沖縄那覇市若狭公民館のパーラー公民館の取り組み



Studio-LのCo-Minkanの取り組み

人々が集い、まちを「じぶんごと」として
使いこなす
そのための「場」としての公民館

公民館：幸民館
Co(collaboration/community)民館・・・

新しい社会基盤としての公民館

小さくて、顔の見える〈社会〉をたくさんつくる

**サークルや倶楽部の継承を考えて無理をするよりは、
たくさんのサークルや倶楽部をつくって、
そこが「続ける」こと**

⇒ 〈社会〉がつながっていく

**小さなドット(点：ちいさな〈社会〉)
が多様に動き回る社会**

公民館=小さな〈社会〉が無数にある社会

7. 行政の「学び」化／「学習」する行政組織

行政を「学び」的に組み換える

「学び」続ける行政組織

←宮崎県綾町の自治公民館システム

(綾町には自治会がない。すべて自治公民館)

公民館・社会教育が

生活基盤をつくる

すべての人がアクターとなる社会を

北海道公民館協会

首長部会：全179市町村のうち80余の首長が組織
道議：社会教育を学ぶ会

公民館を活用した住民自治による地方創生
首長が「教育」的に変化する
行政が「学び」化する

⇒ **全国の公民館に「首長部会」を**

**Society5.0時代・人生100年時代の
社会の人的基盤（すべての社会基盤の基盤）の創生へ
その基盤としての社会教育・公民館**